

京都御所 新春の展示

(令和4年 干支「寅」)

今回の展示作品

墨画龍虎

明治天皇が御常御殿の御寝の間（寝室）でお使いになっていた六曲一双の屏風で、江戸時代中期（18世紀）に活躍した、狩野派の流れをくむ絵師鶴澤探鯨の作品です。

本作品では、右隻に岩に両足の爪を立てて渦巻く雲の間から姿を現す龍を、左隻に岸辺の竹林で龍の出現に遭遇する2頭の虎を画いています。岸近くの虎は龍の出現に驚き威嚇の声を上げ、座した虎も前足を一歩進め警戒の視線を龍に向けています。左右の画面を水流によって繋ぎつつ、一双の屏風の中で龍の出現によって空気が一変する劇的な瞬間を墨の濃淡で表わしています。



左隻



右隻

絵師 鶴澤探鯨（1687～1769）

鶴澤探鯨は、狩野派から分派した鶴澤派の2代目です。狩野探幽門下であった父探山とともに、慶仁親王（後の中御門天皇）御所（宝永5年（1708）造営）、宝永度内裏（同年造営）等の障壁画製作を行いました。

探鯨は、後進の育成にも力を注ぎ、京都、大阪などに門人を抱え、鶴澤派の門流は、円山応挙を始めとする江戸後期に活躍した絵師達を多数輩出しています。7代目鶴澤探真は、土佐光文とともに安政度内裏（安政2年（1855）造営）の絵師頭取を担いました。



左隻拡大図



右隻拡大図